

橘氏は定事

〔職原抄下〕學館院別當

橘氏之中補之、此號長者、略於氏爵者、是定人。舉之、是定人者、擇其人、被下宣旨也、近代九條流被傳之、仍他人不望之、依之橘家、皆屬彼家云々、

〔標註職原抄下〕是定は、氏爵を定る人のことなり、橘家に外戚の縁ある王卿に是定を仰らる、その例、中關白道隆を始とす、玉葉に中關白爲大納言行之、其故者、攝津守中正之妻者、中納言橘澄清女也、即道隆道兼御堂等之外祖母也、依彼昭穆行此爵事云々と見え、江家次第旁書に、依中關白例、九條流被傳之とあり、

〔貞丈雜記四官位〕學館院と云は、橘氏の學文所也、後世堂上衆に橘氏絶てなし、依之橘氏の長者なし、後世九條殿學館院別當に成給ふ也、梅宮の社家どもは橘氏にて、九條殿に付隨て、官位の願をたのみ申也、依之九條殿は、おのづから橘氏の長者の如くに成たる也、九條殿は藤原氏なり、

〔江次第抄正月〕叙橘氏 是定者、中納言橘澄清、以中關白道隆爲是定、令知學館院學生事、以來學氏爵也、

〔台記〕久安三年三月廿九日壬辰、藏人辨光房來、略右大將使人問曰、此文下辨乎、下外記乎、只今光

房來下之者、開見橘氏申請、以余藤原賴長爲是定之文也、對曰、可下大外記師安者、據治曆元年十二月廿三日東記

三十日癸巳、師安來曰、昨日橘氏は定宣旨下了、承保三年、土御門右府外記書消息、副宣旨遣氏人許、今度

可同之由在之、予諾、戊刻散位橘以長非長來曰、師安書副消息、給是定宣旨者、西宮十六卷臨時二裏

書、召外記仰氏院云々、今案依氏院顛倒無人賜氏人歟、四月一日甲午、辰二點參官、白重有文政了

著侍從所、有御前食了退出、略勘故京極殿藤原師實御記、是定後以吉日、行公事之由不見、因之今度不

擇日、京極殿治曆元年十二月二十三日爲是定、見二條關白藤原教通記、不見京極殿御記、四日丁酉、依梅宮祭、可修由被、假故而是定後、初修